

祈りの言葉と詩の言葉

——ホプキンスの詩における命令表現——

山 田 泰 広

1. はじめに

ホプキンス (Gerard Manley Hopkins, 1844-89) が詩というものをどのように考えていたのか知るには、その言葉の使い方に焦点を当ててみるという。例えば、詩の中でのある状況における話し手の言葉の使い方と、現実の同じような状況で使われると予想される言葉の使い方を比較することで、ホプキンスが詩的言語の特徴と考える表現のありようが明確になるように思われる。ここでは話し手が神に向かって命令文で話しかける場面を彼の作品から選んで、その表現の特徴を明らかにしてみたい。

2. 命令文の機能

命令文は表現者——話し手もしくは書き手——が聞き手もしくは読み手と見なす相手に向かって直接的に (1) すべきことを伝えたり、(2) 指示や助言を与えたり、(3) 推薦や提案をしたり、(4) 申し出をしたりするのに使われる。以下にその例を挙げる¹⁾。

Come in and sit down, please. (1)

Don't open the window — it's cold. (2)

Put the coin in the slot and press the red button. (2)

Don't ask her — she doesn't know. (2)

See the doctor — it's the best thing. (3)

Have a bit more wine. (4)

もっとも、命令文を発する話し手とそれを向けられた聞き手、あるいは命令文の書き手と宛て先である読み手——つまり1人称と2人称——の関係や文脈によって、その言語行為は命令と呼ばれたり、依頼と呼ばれたりするのであって、命令文は基本的に命令の表現である。

3. 日常的場面における命令文

私たちが生活している日常的場面では、意思の伝達を目的とした口頭での会話の場合には、相手が面前にいるにせよ電話のように面前にいないにせよ、命令文は、相手に命令した人間の声が聞こえて、その言葉が理解でき、命令した人間には相手がそれに従ってふるまうかどうかの反応がすぐわかる状況で使われる。一方、手紙やイーメールのような文書の場合には、相手は面前にはいないので、従うことが期待されているものの、返信が来なければその反応はわからない。いずれにせよ、日常的なコミュニケーションの場面において命令文が使われる目的は、基本的に、言葉に向けている相手にある状況においてあることをするように、あるいはしないように求めることである。

一般に日常的場面では、命令文が使われる時、話し手もしくは書き手は相手はその命令に従うことを当然期待している。そのためには、相手が命令文の意味と意図を正しく理解する必要がある。というより、コミュニケーションを成立させるためには、言葉を使う側が配慮して、話し手である自分が何を言っているのか、どういう意図で言っているのか、相手が理解しやすいように表現する必要がある。話し手が、ある状況においてあることをするように2人称の聞き手に求めて、その結果聞き手が求めに応じてそのことをするには、話し手の表現の意味——自分が何をするように言われているのか——が聞き手に理解されなければならない。話し手が‘Come in and sit down, please’と聞き手に言った時、その場で聞き手にその言葉の意

味がわからなければ、その状況においてその表現は役に立たないことになる。そういうことにならないように、期待どおり聞き手に行為を促すには、まず命令の内容が明確にわかるように、集団で習慣的に使われている表現を使う必要がある。そのような配慮が必要である。

4. 祈りで使う命令文

次に、特殊な場合として、命令文を使って神に願い事をする場合を考えてみよう。口頭にせよ文書にせよ、願い事をする人はその言葉が神に届き、その訴えに耳を傾けてもらえることを期待している。しかしながら、神は目には見えないし、言葉が神に届くかどうか、訴えに耳を傾けてもらえるかどうか、願いが聞き入れられるかどうかかわからない。ただ信じて、祈るだけである。このような状況で使われる命令文も基本的には日常的場面で使い方と目的は変わらない。言葉に向けている神にある状況においてあることをしてもらえるように、あるいはしないように求めることである。その場合、表現に求められる条件も人を相手にする場合と同じである。すなわち、期待どおり聞き手である神に願いをかなえてもらうには、祈る人が神に理解してもらえると信じる表現を使って語りかける。一般には、公的な祈りにおける表現のように、唱える文言が決まっていたり、ほとんどの私的な祈りにおける表現のように、わかりやすい言葉で唱えられたりする。祈りでは話者の意思を神に伝達することが目的なので、意思の伝達に適した習慣的表現が使われることになる。

5. ホプキンズの詩における命令文

5.1 The Wreck of the Deutschland (1)

さて、それでは次に、ホプキンズの詩の中で使われている、神に向けられた命令文について見てみよう。まず、長編詩‘The Wreck of the Deutschland’の第1部第9連にそのような命令文を使った表現がある。

Be adored among men,
God, three-numberèd form;
Wring thy rebel, dogged in den,
Man's malice, with wrecking and storm.

(第9連, 1-4行)

詩の中の話し手は「三位一体の神」(three-numbered form)に向かって、「人々に崇められ給え」、「難破と嵐によって、御身に逆らい、うちにこもる人間の敵意を懲らしめ給え」と話しかける。最初の命令文は、人々、つまり人間集団の中で神が崇敬されますようにという願いを表現したものであり、次の命令文は人間の中にある悪、つまり神に背く性向を、激しい苦悩、恐怖を経験させることで懲らしめ、改心させてくださいという願いを表現している²⁾。

問題はこれらの表現が意思の伝達に適した表現になっているのかである。話し手は言うまでもなく神に願いをかなえてもらいたいと思っているはずである。その祈りは本心からの願いを表すものであって、言葉だけのいい加減なものではない。だとすれば、その内容を神に明確に伝えるには自分以外の者にとっても理解しやすい表現でなければならない。その条件をこれらの表現は満たしているのだろうか。

最初の命令文については文字通りの表現なので、私たちもその意味を理解するのに困難を感じることはない。それに対して、次の命令文は表現が複雑である。‘wring’という動詞は辞書を調べると「(布などを) 絞る」「(財産などを) 力づくで得る」「(体の一部を) 強くねじる」といった意味がある。しかし、実際には、話し手は「反逆者」(rebel) である「人間の敵対心」(Man's malice) を文字通り物理的に絞ったり、ねじったりするように神に求めているわけではない。心を物理的に絞ったりねじったりはできない。‘with wrecking and storm’という修飾語句があるため、物理的な暴力を連想させるが、‘wring’はこの文脈では「(心を) 激しく苦しめる」という意味である³⁾。要するに、悪党退治のイメージを伴う表現で神による悪の

制圧を求めているのである。「人間の敵意」を「御身に逆らう謀反人」と、また、それが人間性に根ざす状態を「巢窟に巣くう」(dogged in den) と擬人化したり、「懲らしめる」という意味で‘wring’という、より具象的なイメージを伴う動詞を使ったりして、内面的事象を物理的事象のように表現しているために表現が複雑になっているのである。

ただ神にあることをするように求めることだけが表現の目的であるならば、常套的な表現を使うはずである。常套的な表現は自分以外の者にも理解しやすいからである。その点で上の例は常套的ではなく、詩人以外の者には理解しやすいとは言えない。

だから、この表現の第一の目的は別にあると考えるべきである。その目的とは、神に向けて言葉を発する者ともその言葉を向けられた者とも異なる第三者の立場でその表現を読んだり聞いたりする人を、まずその語や観念の取り合わせの特異さと適切さで驚かし、納得させ、印象的な響きと思考のスタイルで魅了することである。作品の最初の読者である詩人にとって、上の表現のうち‘Wring thy rebel, dogged in den,/Man’s malice, with wrecking and storm.’という一節はそのような観点から判断すると、目的に合致した、好ましいものだと言える。いくつかの観念の組み合わせは常識的でなく、読む者、聴く者を不意打ちするが、表現されてみれば適切であるように思われる。さらに、音響的には一定のリズムに乗って規則的に配置された脚韻 (men-den, form-storm) と連続する3組の頭韻 (wring-rebel, dogged-den, Man’s-malice) が響き、聴く者を魅了する。音響の観点から見れば、‘wring’という語が選ばれた理由は‘rebel’という語との押韻を考えてのことであったと言えるかもしれない。

5.2 The Wreck of the Deutschland (2)

次の例は同じ‘The Wreck of the Deutschland’の第1部を締めくくる第10連にある。

With an anvil-ding

And with fire in him forge thy will
Or rather, rather then, stealing as Spring
Through him, melt him but master him still;

(第10連, 1-4行)

この表現の目的もすでに検討した第9連の表現と同じであろう。‘forge’ ‘melt’ といった命令法の動詞は ‘wring’ と同じように、内面的事象を物理的事象のように表現するために選ばれた動詞であり、また ‘wring’ が ‘rebel’ と押韻しているように、それぞれ ‘fire’ ‘master’ と押韻している。鍛冶屋が鉄を鍛えるように、衝撃的な方法で信仰を堅固にしてください、あるいは春がいつの間にかやってきて雪を融かすように、ゆっくりと徐々にかたくなな心をやわらげてください、といった願いを表現したものである。もちろん、文字通り物理的に人を「鉄床で打ち、火入れをして鍛える」ように求めているのではない。聖霊の働きかけによる信仰の勝利、改心を求める表現なのである。ここでも表現の細部に注目すると表現の目的が見えてくる。すなわち、読む者、聴く者を表現のありようで魅了するのが第一の目的だとわかる⁴⁾。

5.3 The Wreck of the Deutschland (3)

次の例は ‘The Wreck of the Deutschland’ の第34連にある。

Now burn, new born to the world,
Double-natured name,
.....

A released shower, let flash to the shire, not a lightning of fire hard-hurled.

(第34連, 1, 2, 8行)

これはキリストに現代世界でのよみがえり——ホプキンズにはカトリックへの改宗を意味する——を求める表現である。命令法の動詞 ‘burn’ が内

面的事象を物理的事象のように選ばれている点はこれまでの命令法の動詞の場合と同じである。近い位置にある‘born’と押韻している点も同じである。信仰の復活を発光もしくは発火のイメージで表現し、そのイメージと響き合うように8行目でキリストの慈愛を表すために慈雨の輝き、神の厳しい愛を表すために火の稲妻という表現を使っている。そのような技巧性が読む者、聴く者の興味を引くのである。

5.4 The Wreck of the Deutschland (4)

‘The Wreck of the Deutschland’の結びは難破で亡くなった修道女に執り成しを依頼する祈りで終わっている⁵⁾。

Remember us in the roads, the heaven-haven of the reward;

Our King back, Oh, upon English souls!

Let him easter in us, be a dayspring to the dimness of us,

be a crimson-crested east,

(第35連, 3, 4, 5行)

話者が求めているのは修道女が天国で自分たちのことを心にかけてくれること、それからキリストがイギリス人の心に戻ってくる——つまりはカトリックに改宗する——ように執り成してくれることである。ここでの命令法の動詞はとりたてて物理的事象とは関係がない。その点で話者が何を求めているのか理解しやすいとは言える。しかし、続く部分では復活したキリストを「自分たちの薄暗さにとっての夜明け」(a dayspring to the dimness of us), 「上方がクリムソン色になった東方」(a crimson-crested east) と表現して信仰の回復が希望の回復であることを示唆し、内面的事象を物理的事象として表現しており、そういう細部では表現が常套的でないで、意味の理解にやや骨が折れる。

5.5 Spring

次の例は「明るいソネット」(Bright Sonnets) と呼ばれる作品群に含まれる 14 行詩 ‘Spring’ の結びの部分にある。

Have, get, before it cloy,
Before it cloud, Christ, lord, and sour with sinning,
Innocent mind and Mayday in girl and boy,
Most, O maid’s child, thy choice and worthy the winning.

(11-14 行)

この詩における命令法の動詞は ‘have’ ‘get’ である。話者が主キリスト (Christ, lord) に求めているのは、無垢な心を無垢なまま手に入れることである。みずみずしい春の喜び (joy) に溢れる「無垢な心」(Innocent mind) を捧げるので、それを受け取るようにとキリストに申し出ている。内面的事象を物理的事象で表現するホプキンズの方法は「心の墮落」を「味がくどくなる」(cloy) 「暗くなる」(cloud) 「すっぱくなる」(sour) といった表現に見られる。このように上の例も命令の表現として常套的ではない。

動詞の選択が常識的でないのは表現それ自体に読者あるいは聞き手を注目させるためである。注意を引くための工夫は他にもいくつかある。例えば、まず意味の単位 (sense unit) が短いものから長いものへと量的に漸増していることに気がつく。頭韻の連鎖も特徴的である。また、語尾が子音で終わる語に続く語の頭が子音で始まるケース (Have-get-before, it-cloy, it-cloud-Christ, with-sinning, Innocent-mind, and-Mayday, and-boy, maid’s-child-thy, and-worthy) が著しく多く、音読に際して子音間に音留保 (hold) が頻繁に生じるので、その部分では軽快に流れるようには読めない⁶⁾。さらに、同格関係にある ‘Innocent mind’ と ‘Mayday’ の間、および ‘choice’ とその修飾語である ‘worthy’ の間に標準的には必要のない ‘and’ を挿入したり、‘Most’ とその被修飾語である ‘worthy’ (標準的には worth となる) の間に呼びかけ表現である ‘O Maid’s child’ と ‘Innocent mind’ の同格表現

である ‘thy choice’ を, ‘worthy’ と ‘winning’ の間に ‘the’ を挿入したりしているのも, 音調のための破格だと見なすことができる。破格ではあるが, 意味に致命的な打撃を与えるわけではないので許容されている。強勢を置かず, 意味上の重要性もない単音節の冠詞 the や接続詞 and, 形容詞の語尾 y を加えることでリズムを安定させているのである。要するに, このような非標準的表現の使用は文法や語法の規範より, 響きの効果が優先されていることを物語っていると言える。これらの工夫は表現を印象的なものにするためのもので, 響きの面で私たちに美的印象を与え, 文章スタイルの特異さによって私たちを驚かす。

5.6 In the Valley of the Elwy

次の例は ‘In the Valley of the Elwy’ からのもので, この作品も「明るいソネット」の一篇だが, 次のように神への呼びかけと命令文で締めくくられている。

God, lover of souls, swaying considerate scales,
Complete thy creature dear O where it fails,
Being mighty a master, being a father and fond.

(12-14行)

この表現では話者は神に何をするように求めているのか。「御身の創り給いし愛しきものを完成し給え」とは人間と環境を秤にかけた時, 人間はその気持ちよい環境とバランスがとれないので, 人間を環境とバランスのとれるように変えてくださいという願いの表現である⁷⁾。

この部分にも表現を印象的にする技巧, 工夫がいくつかある。例えば, ‘lover of souls’ という表現はともかく, ‘swaying considerate scales’ (思いやり深い秤を動かす) は, キリスト教の神について述べた表現としては斬新なものであったと思われる⁸⁾。語法の点では, ‘considerate’ は標準的には *considerately* を使うべきだろう。‘Complete thy creature dear where it fails’ は

「愛しい被造物の足りないところを補う」ということだが、これだけでは何が言いたいのかわからない。「足りないところ」が何であるかは先行する部分と照らし合わせないと理解できないようになっている。表現が抽象的でその部分だけでは言いたいことが明確ではない。

‘Being mighty a master, being a father and fond’ という言い回しも標準的ではない。英文法のルールからは逸脱した表現になっている。Being a mighty master, being a fond father が標準的語順である。語順の変更によって変わるの、口調、つまりリズムである。前者は後者とくらべてリズムがなめらかである。また ‘mighty’ が限定する ‘master’ の前、‘fond’ の位置が最後になっているため、その「やさしさ」の面がより強調されていることがわかる。

5.7 Thou art indeed just, Lord

祈りで作品が終わる例をもう一つ挙げておく。

Mine, O thou lord of life, send my roots rain.

(14行)

この祈りは自らの魂の救済を渴望する内容であるが、lord-life, roots-rain と対称的に構成された頭韻を用い、内面的事象を物理的事象のように表現している点が意思の伝達を至上目的とする表現と異なっている⁹⁾。この命令文はその細部の工夫によって読者や聞き手の心を捉え、感銘を与えることを第一の目的としているため、意思の伝達という点から見れば効率が悪い表現となっている。

6. おわりに

以上見てきたように、ホプキンズの詩で話し手が神に向かって命令文で話しかける場面においては、その表現は、2人称への意思の伝達を唯一の

目的とする命令表現とは異なり、詩人自身を含む鑑賞者に表現そのものの味わいを提供することを第一の目的としている。

2人称への意思の伝達を目的とする表現では、2人称の受信者が迅速にその意思を理解できるような表現が効果的で、求められる表現である。この場合、言葉はその意思を伝え、理解してもらうための道具である。一方、鑑賞者に味わいを提供するのを目的とする表現では、鑑賞者が興味を持ち、驚き、感銘を受けるような表現が求められる。そのため詩の中の命令表現は、これまで見てきたように、2人称への意思の伝達という点では非実用的な表現になることもある。ホプキンズの詩の表現は、常識的な感性の持ち主には風変わりと思われることもあるだろうが、表現における常識や慣習の中で鈍い刺激に眠りかけている私たちの感受性への一撃となる場合が多い¹⁰⁾。彼は若い頃、テニソンが陥ったマンネリズムの陥穽について問題視しているが、それは彼がそうした表現の停滞を詩の価値を損なうものと考えていたからである¹¹⁾。新しい表現スタイルの探求——それが詩人ホプキンズの生涯のテーマである。

注

- 1) 命令文についての説明と例文は British Council の英語教育サイト *LEARNING ENGLISH CENTRAL* を参考にした。
(www.britishcouncil.org/learningenglish-central-grammar—imperativeshtm)
- 2) *Oxford English Dictionary* には 'wring' の語義が 10 ほど挙げられているが、その中に "To turn or deflect (a matter) into or to something; to convert" という記述がある。'wring' には「懲罰」によって「改心」に至るという含みがある。
- 3) *Oxford English Dictionary* には 'wring' の語義として "To cause anguish or distress to (a person, his heart, etc.); to vex, distress, rack. In freq. Use from e 1780 esp. with heart" という記述が載っている。
- 4) このような詩的言語観は、ロマン・ヤコブソン (Roman Jakobson, 1896-1982) が『言語学と詩学』において定義しようとした詩の見方に近い。ヤコブソンは詩における言語使用において支配的な地位を占める機能を「詩的機能」(poetic function) と呼び、それを「メッセージに対する志向」(a set toward the message) と定義した。「メッセージに対する志向」とは言語使用者である詩人(話し手)の立場から言うとかあることを伝えるためにか、自分の気持ち

ちを表したり、相手をうごかしたりするためにメッセージを作るのではなく、メッセージを作ること自体が目的となるようなメッセージ作成のことである。もちろん詩における言語使用において「詩的機能」が唯一の機能ではなく、「詩的機能」は詩以外の言語使用においても見られるが、その機能が最高度に達するのは詩の作成においてであるとヤコブソンは述べている。ホプキンズ自身も「詩とは聞くことを通して鑑賞するために組み立てられたスピーチ、すなわち、意味に対する興味よりもむしろそれ自体に対する興味をもって聞かれるように組み立てられたスピーチ」と定義している。（‘Poetry and Verse,’ *The Journals and Papers*, p. 289）ヤコブソンとホプキンズの言語観の相似性については、山田泰広「共鳴する精神——G. M. ホプキンズとロマン・ヤコブソン」（*NONDUM* 第9号, 2001）を参照。

- 5) 話し手は溺死した修道尼がすでに神のみもとにいと見なしている。その尼僧を尊敬の念をこめて‘Dame’と呼び、神と人との唯一の仲介者イエス・キリストをとおして、この地上の旅を続けている「私たち」のために執り成すように頼んでいる。
- 6) メイヤー, A・ジョージ著, 古橋聰他訳『米語のリズム』中部日本教育文化会, 1973. 83-84 頁参照。語中の音節や語尾の音節の末尾の各子音は、音の流れの短い休止をつくる。これを“音留保”作用 (holding operation) または“音留保” (hold) と呼ぶ。英語には子音が非常に多く、大多数の語は子音で終わる。
- 7) 1879年4月8日付 *Bridges* 宛書簡参照。この作品は「対応」(correspondence) という数学的な発想をもとに構成されている。最初の4行では、語り手を親切にもてなしてくれたある家族をよい香りが包んでいたことが語られている。次の4行ではウエールズの風景はその香りと同じように快いがそこに住む人々はその家族に対応していないと述べられている。そこで、残りの6行で、2つの4行で語られた人間と環境の関係がそれぞれ対応するように「足りないところ」を補ってほしいと、すなわち、そこにすむ人々もその家族と同じように、回りの世界と調和するように魅力的にしてほしいと、創造主である神にお願いしているのである。
- 8) 西洋の絵画や彫刻では秤をもつのは「正義」の女神である。「正義」の女神は、一切の私心を交えないように目を帯で隠し、あらゆるものを「正義の秤」にかけて判断する。
- 9) 山田泰広『『エレミア書』とホプキンズのソネット (117)』『南山短期大学紀要』第36号 31-41 頁参照。この1行は「神の慈悲にすがる哀訴」である。神がここで「生命の源である神」に求める「雨」とはいのちを再生させる神の慈愛である。春の雨が乾いた大地を潤して根元まで染み透り、その精気が花を咲かせるように、いまだわびしい「冬」の中において「宦官」を自嘲するしかない自分

にも魂の乾きを癒してその精気を甦らせる神の慈愛が必要だと、話し手は神に訴えている。

- 10) 1879年2月15日付友人 Bridges 宛書簡参照。ホプキンスは独特であることはパターンやデザインの長所であり、風変わりになることは独特であることの長所であるが、自分の詩はどちらかと言うと風変わりでありすぎると認めている。
- 11) 1864年9月10日付学友 Baillie 宛書簡参照。語彙が精選され、叙述が美しくイメージが美しくても、発想や表現が常套的で、作風が固定してしまう時、読者は感動しない。それまでテニソンはいつも新しく、感動的な詩行を発表してきたと思ってきたが50代半ばになってテニソンにもそういう傾向が見えることを若き日のホプキンスは指摘している。

参考文献

- Mackenzie, Norman H. ed., *The Poetical Works of Gerard Manley Hopkins*. (Clarendon Press, 1990)
- Abbott, Claude C. ed., *The Letters of Gerard Manley Hopkins to Robert Bridges*. (Oxford University Press, 1970)
- 安田章一郎・緒方登摩訳『ホプキンス詩集』（春秋社、1982）
- 安田章一郎『G. M. ホプキンス研究』（清水弘文堂、1968年）
- Milward, Peter. *A Commentary on G. M. Hopkins' THE WRECK OF THE DEUTSCHLAND* (北星堂、1968)
- Milward, Peter, *A Commentary on the Sonnets of G. M. Hopkins*. (北星堂、1969)
- 緒方登摩（編）『ホプキンスのソネット』（研究社、1993年）
- Mackenzie, Norman H, *Hopkins*. (Oliver and Boyd, 1968)
- Mackenzie, Norman H. *A Reader's Guide to Gerard Manley Hopkins*. (Cornell University Press, 1981)
- Eliot, T. S., *The Three Voices of Poetry On Poetry & Poets*. (Faber & Faber, 1957)
- ヤコブソン, R, 川本茂男他訳『一般言語学』（みすず書房、1973）
- 山中桂一『ヤコブソンの言語科学1誌とことば』（頸草書房、1989）
- セルデン, ラマーン, 栗原裕訳『ガイドブック現代文学理論』（大修館、1989）
- 水之江有一編著、『絵で見るシンボル辞典』（研究社、1986）